

*The Dating of the Historical Buddha, Die Datierung des historischen Buddha* (*Symposien zur Buddhismusforschung, IV-1 and 2*), edited by Heinz Bechert (*Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse, Dritte Folge Nr. 189, 194*), Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1991 and 1992, Part 1, xv-525, Part 2, x-530.

ハインリッヒ・フォン・シュティーンクロン編

### 叙事詩とプラナーナの文献目録（1985年迄）

原 實

Tübingen 大学教授 H. von Stietencron が主催する Tübingen-based Purāṇa Project は過去その第1-2巻として Brahma purāṇa の批判的出版と語彙索引、内容解説の2大冊を公にし、筆者も本誌において両書を紹介する機会があった（東洋学報72, 1990, pp.166-7）。その企画はその後も順調に継続され、その第3-4巻が同じ装いの下に総2116頁の大冊となってここに出版された。

インド学の諸分野においてこれまで幾つかの文献目録が企画され、Veda 学には夙に L. Renou: *Bibliographie védique* (Paris 1931) があり、その他オランダの Kern Institute 刊 *Annual Bibliography of Indian Archaeology*, 又仏教学には *Bibliographie bouddhique* (Paris 1930-1967) 等を数え得るが、現在もお進行中のものとして R. N. Dandekar: *Vedic Bibliography I-IV* (Poona 1946-1985), K. Potter: *Bibliography of Indian Philosophies I-II* (Delhi 1970-1983) が存在する。しかし、膨大な叙事詩並びに Purāṇa 文献に関しては極めて部分的なものを除き、かつてこの種の試みがなされなかった。他方 Purāṇa 文献に関しては近時 Ludo Rocher が有名な J. Gonda の企画 *History of Indian Literature* の一環として *The Purāṇa* (Wiesbaden, 1986) の名著を世に送り、この膨大な文献群への鳥瞰を与えた事は記憶になお新しく、筆者も本誌にそれを紹介した（東洋学報72, 1990, pp.170-168）。両叙事詩の批判的出版も完成し、夫々に *Pratika-Index* も用意され、優れた翻訳も進行中である現

在、総括的な研究文献目録の編纂は研究者懸案の事業として等しく待望する所であった。その意味で本書の出版はインド学全体の歴史からみても極めて重要な意義を有している。

編者 H. von Stietencron の序文の記すところによれば、そもそもこの文献目録を企画した Tübingen System of Textprocessing Programs (TUSTEP) はもと Viṣṇu-purāṇa の校訂のみを意図して出発したものであった (P. Schreiner 1976) が、近時の事務機器の飛躍的発達に伴い、原初の計画を一部変更して、1979年に企画を新たにし、実質的には既述の通り1982年に開始された。元来は Purāṇa 文献の Bibliography のみを意図していたが、後にその内容、構成を同じくする叙事詩のそれへと拡大されたという。Deutsche Forschungsgemeinschaft より1982-1987の間に研究助成を得て、Peter Schreiner, Renate Söhnen, Peter Flamm 先ずその任に当たり、助成金終了後の1988-1992には、Tübingen 大学 Institut der Indologie und vergleichende Religionsgeschichte に於いて H. von Stietencron の指揮の下、三人の若い学生が整理に当たり、それにイギリスの John and Mary Brockington 夫妻その他が精力的且つ献身的に協力してここに完成した。

周知の通り Mahābhārata に関しては Bruce J. Long, *The Mahābhārata: a select annotated bibliography* (Ithaca, New York; Cornell University 1977) (本書 No. 4118) があり、A. Hildebeitel も Kṛṣṇa 研究を中心として *Kṛṣṇa and the Mahābhārata: a bibliographical essay* (ABORI 60, 1979, pp. 65-107) (No. 3076) を公にし、又その第6巻に挿入された有名な *Bhagavad-gītā* に就いては W. Callewaet and Sh. Hemraj, *Bhagavadgītānuvāda, a study in transcultural translation*, Ranchi: Satya bharti 1983 (No. 1427) 及び、J. C. Kapoor, *Bhagavad-gītā, an international bibliography of 1785-1979*, New York, London 1983 (No. 3560) がある。一方 Purāṇa 文献についても P. G. Lalye, *Purāṇa-vimarśa-sūcikā: Bibliography of articles on Purāṇas*. Hyderabad 1985 pp. 269 があり、不完全ながら Alphabet 順に約700の entry を有し、“Purāṇa” 誌 (1955-1984) 掲載論文の梗概を載せて居る (89-269)。従来 H. Oldenberg, H. Jacobi, E. W. Hopkins, V. S. Sukthankar, W. Kirfel, R. C. Hazra 等の優れた研究者の業績を頼りに、これら不完全な文献目録によってこの分野に研究を進めて来た者にとって、実に8168の entry を擁し、これまでの目録を量質に亘って大幅に凌駕している本書の出現はまさに研究者の鶴首して待つ所であった。その中5578に就いては大小の解説註記が執筆者の責任に於いて添付されている。

しかしながら一口に Epic and Purāṇic Bibliography と言っても、関連文献を網羅する事は出来ない。既にして Mahābhārata は「ここにあるものは他にもあり、ここになきものは他には無し」と自ら称してその普遍妥当性を誇り、百科全書性格を有するから、その関連する分野に限りなく、それを拡大していけば際限のない道理である。そこでまず叙事詩や Purāṇa と密接に関連して居る法典 (Dharmaśāstra)、並びに叙事詩に取材した美文調詩作 (Kāvya) はこの文献目録から除外される。同文献中に紹介される挿話、物語の発展、改作の類の列挙にも自ずから限界がある。更に本書は両叙事詩、Mahāpurāṇa、Upapurāṇa、caste Purāṇa、Sthala-purāṇa の公刊された原典 (批判的出版、部分的出版をも含む)、翻訳、研究等を含むが、写本の類はそのカタログを除いて除外される。

周知の通り、両叙事詩は夫々1966、1975年に Critical Edition の刊行を見た為、それ以前の研究者は夫々幾つかの異なった Edition によって章句を引用し、その習慣は一部に於いて現在も続いている。必然的に同一の引用章句に番号の不統一を免かれず、その傾向は今なお批判版の出版を見ていない Purāṇa 文献群に於いて著しい。この種の参照上の不便を克服する為、編者は本書の巻末に添付された索引の利用を奨めている。更に編者は特に9項目より成る「利用者の手引き」(User's guidelines) を執筆している (pp. XII-XVIII) から、本書をひもどき、又その不便欠点を批判する前に読者はそれを参照する必要がある。同様に6頁に亘る The Indexes (pp. XVIII-XXIII) も本書を使用するに当たって必読の部分となっている。

文献目録としてそれ自体記念すべき出版であるが、本書は巻末に添付されている四種の膨大な索引の完備によって利用価値が高まる。ここに四種の索引とは第一に Index of Names (pp. 1367-1458)、第二に Index of Contents (pp. 1461-1896)、第三に Index of quoted passages (pp. 1899-2076)、第四に Index of Sources (pp. 2079-2116) で、この中でも400頁を超える第二索引は所謂「事項索引」に相当し、topics, subjects, methods, motifs, texts, translationsその他を含む。これらの事項は更に keywords, catch-words, cross-references と有機的に関連して編纂者並びに協力者の努力が並々でなかった事を想像せしむるに充分なものがある。もとより事項その他の選び方には自ずから限界があり、厳密を期する事は至難の業で、利用者には不満、批判の出る事は必至、且つ不可避であるが、にも拘らず筆者は編纂者の労を多とするに吝かでない。何故ならばそこには叙事詩と Purāṇa の文化史的諸問題、特定語彙の研究史が整然と配列され、その Mahābhārata, Rāmāyaṇa, Vāyu-purāṇa 等の項を見れば問題

別に研究史が一望の下に鳥瞰され、又 Editions, Indices, Translation の項を見れば書誌学情報が網羅されて居る。次いで第三の索引を参照すれば、叙事詩と Purāṇa の個々の章句についての研究が挙げられて居る。例えば今一例を Bhagavadgītā にとって見れば、それと Upaniṣads, 仏教との関係、その業思想、Sāṃkhya 哲学、yoga の用例、各国語訳等の諸問題は第二索引 pp. 1491-1502 を見ればよく、また原典批判に関心の有る者は Textual Criticism (Monographs) の同索引の該当箇所 (p. 1829) を参照すればよい。更に全700頌の各々について過去の研究論文を検索しようと欲する者は第三索引の pp. 1902-1909 を見れば、それらが一目瞭然、列挙されて居るのを見出すであろう。但し、叙事詩や Purāṇa に見える挿話や、独立に屢々論じられる物語 (Nalopākhyāna, Sāvitrī, Devī-māhātmya 等) の類の文献目録を参照するには、本文とは別に第二索引の当該部分を見なければならず、個々の章句については第三索引の Mahābhārata, Mārkaṇḍeya Purāṇa 等の相当箇所を参照せねばならないが、それらは全て既述の「使用者への手引き」を予め一読しておけば、さして痛痒を感じるものではない。

唯、本邦学者の研究論文が西欧のそれに比して少ないのを些か遺憾とする。例えば高楠順次郎、辻直四郎、服部正明、宇野惇、上村勝彦に次第する我が国の Bhagavadgītā の翻訳に関しては辻博士のそれ (No.714) を除いて言及する所がなく、又 Rāmāyaṇa の中国語訳は季羨林の手によって北京の人民文学出版社より全8巻となって1981-4年の間に刊行されているにも拘らず、それに関説する所がない。概して東アジアにおける研究成果が殆ど言及されていないのは遺憾であるが、それは専ら情報の不足に由来している。「第四索引」を一瞥する者はそこに国学院雑誌、大正大学研究紀要、哲学年報、東北大学文学部研究年報、東洋学報、足利博士記念論集、玉城博士記念論集等の邦語の雑誌、論文集が目止まるであろうが、それらが総て拙稿 Studies on Indian Philosophy and Literature in Japan 1973-1983 (Asian Studies in Japan, 1973-1983, The Centre for East Asian Cultural Studies Tokyo 1985) に拠っていることが判明する。事実、編者の一人 J. L. Brockington はかつて筆者に本稿の送付を乞い、筆者はそれに応じ、又折に触れて出版物を交換しては居るが、本稿は唯1973-83年のわずかに十年間の本邦学者の研究を概観したものに過ぎなかった。筆者はその意味で一斑の責任を感じている。

折から International Association of Epic and Purāṇic Studies の発足が予示されるに当たり、筆者はこの機会に我が国の叙事詩研究を網羅して紹介する必要を感じ、その協力を関係者にこの場を借りて訴えたいと思

う。

批  
評  
と  
紹  
介  
原

東アジアの研究者には少々の不満があるとしても、本書が今後のこの分野における不可欠な文献目録となる事に疑いを容れない。同じくこの分野の研究に従事する者として筆者は本書を企画し、その完成に導かれた H. von Stietencron 教授と、その執行に献身的努力を払われた協力者各位に深甚なる謝意と敬意を表したいと思う。

*Epic and Purāṇic Bibliography (up to 1985) annotated and with indexes*, compiled under the chairmanship of Heinrich von Stietencron by P. Flamm, H. v. Stietencron, J. L. Brockington, A. Malinar, P. Schreiner, K.-P. Gietz, A. Kollmann, S. Dietrich, R. Söhnen-Thieme, A. S. Pfeiffer et al., Edited by H. v. Stietencron, K.-P. Gietz, A. Malinar, A. Kollmann, P. Schreiner, M. Brockington. Purāṇa Research Publications Tübingen, edited by Heinrich von Stietencron, Volume 3, Part I (1x+1-1052) and Part 2 (1053-2116). Part I A-R, and Part 2 S-Z and Indexes. (Otto Harrassowitz, Wiesbaden 1992).